

平成 28 年度 異常気象分析検討会（定例会）議事概要

1. 開催日時

平成 29 年 3 月 2 日（木） 15:00～17:00

2. 開催場所

気象庁大会議室

3. 出席者

別紙 1 のとおり。

4. 議題及び検討結果の概要

下記の議題について検討を行いました。

- (1) 異常気象分析検討会運営要領、異常気象分析作業部会運営要領の一部改正について
運営要領改正のポイントについて検討し、具体的な条文の改正については今後調整することとなった。
- (2) 今年度の活動報告と来年度の活動計画について
平成 28 年度の活動報告に続き、平成 29 年度の活動計画について検討を行いました承された。
- (3) 異常気象の分析や情報の高度化に関連する話題
寒気流出解析及び気象庁全球アンサンブル予報システムについての話題提供に続き、関連質疑を行った。
- (4) 2016/2017 年冬の大気循環場の特徴
日本の 2016/2017 年冬の天候の特徴とその要因について検討を行い、その結果を別紙 2 のとおりとりまとめた。

関連資料は後日気象庁ホームページに掲載します。

平成 28 年度 異常気象分析検討会（定例会） 出席者

異常気象分析検討会 委員

- ◎ きもと まさひで
木本 昌秀 東京大学大気海洋研究所 教授
- なかむら ひさし
中村 尚 東京大学先端科学技術研究センター 教授
- いわさき としき
岩崎 俊樹 東北大学大学院理学研究科 教授
- かわむら りゅういち
川村 隆一 九州大学大学院理学研究院 教授
- たにもと よういち
谷本 陽一 北海道大学大学院地球環境科学研究院 教授
- ひろおか としひこ
廣岡 俊彦 九州大学大学院理学研究院 教授
- ふじべ ふみあき
藤部 文昭 首都大学東京 都市環境学部 特任教授
- まえだしゅうへい
前田 修平 気象研究所気候研究部第二研究室 室長
- ますもと ゆきお
升本 順夫 東京大学大学院理学系研究科 教授
- むこうがわ ひとし
向川 均 京都大学防災研究所 教授
- わたなべ まさひろ
渡部 雅浩 東京大学大気海洋研究所 教授

（◎：会長、○会長代理、敬称略、会長・会長代理以外は五十音順）

気象庁

地球環境・海洋部長、地球環境業務課長

気候情報課長、エルニーニョ情報管理官、予報官

異常気象情報センター所長、予報官

海洋気象課長、海洋気象情報室長、環境気象管理官

関係官

(2016/2017 年冬の天候の特徴)

- 全国的に暖冬で、特に沖縄地方の気温は記録的に高かったが、強い寒気が南下して低温となる時期もあった。
- 降雪量は北日本ではかなり少なく、東日本では少なかった。一方、西日本では降雪量は平年並だったが、大雪となる時期もあった。

(シベリア高気圧が弱かった要因)

北大西洋で高周波擾乱の活動が活発だった影響もあり、ヨーロッパ北部で気圧の尾根（偏西風が北に蛇行）、ロシア西部～西シベリアでは気圧の谷（偏西風が南に蛇行）となった。西シベリアでは、偏西風の南への蛇行に対応して低気圧偏差となり、中央シベリアでは南西からの下層暖気移流が卓越して寒気が弱く、平年と比べてシベリア高気圧が発達しなかった。このため、日本付近は寒気の影響を受けにくく平年より気温が高かった。

(沖縄地方の高温の要因)

東南アジア付近では、高い海面水温に対応して対流活動が活発な状態が持続し、その応答として下層低気圧性循環偏差が維持された。この東南アジアの下層低気圧性循環偏差に伴って北からの寒気の影響を受けにくかった沖縄では12月、1月に記録的高温となった。

(地球温暖化)

全国的に平年より気温が高かった背景として、長期的な地球温暖化の傾向がある。

(西日本の大雪の背景)

1月中旬、2月上旬頃は、ベーリング海付近で発生したブロッキング高気圧が西進して東シベリアに到達した。ブロッキング高気圧の南側では気圧の谷が深まって冬型の気圧配置が明瞭になり、寒気が南下したため、西日本を中心に大雪となった。このブロッキング高気圧の形成には、東南アジア付近の活発な対流活動が影響した可能性がある。

(海氷の影響)

北極海の海氷は秋から冬にかけて1979年以降で最も少ない状態で経過した。11月にシベリア～北極海で明瞭な気圧の尾根となったことには、海氷が少ないことが影響した可能性がある。冬については、ヨーロッパから伝わった偏西風の蛇行の影響が卓越して海氷の影響は不明瞭だった。